

継体天皇と河内馬飼首荒籠

井上 満郎

1. はじめに

継体天皇については多くの議論があるが、なおその謎は多い。即位事情からしてそうで、即位の地はヤマト政権根拠地からかなり離れた河内国くずはのみやの樟葉宮だし、そこにいたるまでの過程も複雑なものであった。

この「樟葉宮」は現在も大阪府枚方市樟葉の地名を伝え、淀川沿いの歴史上の重要港津の地である^(注1)。おそらく古代からそうで、枚方が「比羅架駄」として早くに見えることから^(注2)もそれは推察される。これは新羅へ出征していた近江臣毛野おうみのおみけのが帰途の対馬で病死し、遺骸が帰還する時のこととして「河の尋に、近江に入る」とあり、その折の妻の歌のなかに詠み込まれたものである。毛野の出身地は特定されていないがナからして近江であることは疑いなく、したがって

比羅架駄喩 前吹き上る 輔 杖 輔 積 能 朋 楼 阿 符 美 能 野 愷 那 能 倭 俱 吾 伊 箭 吹 上 能 朋 楼

とあるものは対馬から瀬戸内海経由で難波、ついで淀川を遡行して近江という道筋が想定されていると考えてよかろう。実際にこの全行程が舟行できたかどうかはともかく、瀬戸内から琵琶湖までの行程のうちでただ一つ淀川河畔の枚方が詠まれているということは、枚方・樟葉の地がいかに重要な要衝であったかを示すものと考えていいだろう。

樟葉は枚方の上流で、ほとんどここに隣接する。いうまでもなく古代の樟葉郷で、『倭名類聚抄』には「葛葉」郷として見え、「久須波」と訓じる。ここには早く奈良時代から駅が設けられていて、「河内国交野郡楠葉駅」とある^(注3)。「都亭駅」としての設置であり、この「都亭駅」の意味は明快ではないがおそらく「都に近い主要駅」の意で、平城京の時代^(注4)になっても樟葉の重要性は変わらなかったということになる。

そのことは建波迺安王たけはにやすの反乱事件からも確かめることができる^(注5)。すなわち崇神の「庶兄」の「建波迺安王」が「邪心」を抱いたのに対して崇神は「大毗古命」を派遣して鎮圧をはかったが、まず「和迺坂」わに(天理市和爾町)で戦勝を祈願、そこから「山代之和訶羅河」やましろ わから(木津川。京都府南部)に進出した時これに建波迺安王は応戦する。河の北に建波迺安王、南に大毗古命という設定になっていて、互いに挑みあったのでそこを「伊杼美」いどもみと名づけたといい、泉川(「いづみ」川。木津川)についての地名起源説話になっている。

この戦いで建波迹安王は射殺されるが、残兵を追って「久須婆之渡」に到ったという。北流する木津川から淀川に入って樟葉に達したということになるが、ここでも樟葉が登場し、また「渡」が存在したようにやはり要衝であることをよく偲ばせる。同様のことは他にも見え、雄略の手を逃れるために「意祁王」・「袁祁王」（のちの仁賢・顕宗天皇）はやはり「玖須婆之河」を「逃渡」って播磨に到っている。^(注6)樟葉が渡河点だったのである。右に引いた平城京の「都亭駅」のうち山陽方面に通じる道の淀川のほぼ兩岸に樟葉駅と摂津国島下郡（大阪府摂津市・茨木市近辺）殖村駅が設けられたのも、淀川ないしその渡が地理上重要な意味を持つことを示している。

2. 継体天皇の即位事情

継体天皇の即位は、不審な状況下でのことであった。ヤマト政権から離れた地の樟葉宮における即位を理解するために、諸説に屋上屋を架すことになるがその事情を今少し考えてみる必要がある。

出自問題についてはここでは触れないが、継体誕生のことは『日本書紀』に詳細に見えている。^(注7)「近江国高島郡三尾別業」（滋賀県高島市）にいた父の彦主王は、振媛の美しいのを聞きつけ、妻にするべく迎への使節を「三国の坂中井」に派遣した。そして妻としてその間に継体が生れるが、「幼年」の折に父と死別し、母の振媛は継体を連れて自家に還るが、そこは「高向」だったという。「三国坂中井」は渤海使の来着したこともある三国湊でよく知られた九頭竜川河口の三国町（現坂井市）で、坂井郡がごく最近まで存在した。「高向」はこれも現坂井市である。要するに振媛の地元は北陸沿岸部ということになり、そしてここは長く日本海海運の要港を控えた地であった。この『日本書紀』の記載によれば継体は日本海岸の出身、ないしは少なくともそこを基盤にして即位したということにならざるをえない。

即位の事情は奇妙で、大連であった大伴金村の発議を受けて「大臣・大連等」の衆議の決した最初の候補は仲哀天皇「五世孫」の倭彦王だった。当時の皇位（大王位）はなお明確な継承原理が定まっておらず、ヤマト政権を支える有力豪族たちの合議を必要とし、^(注8)『日本書紀』の記載によってもそうした手続きを経ての決定であったことは疑いない。『日本書紀』は衆議が一決したかのように述べるが、現実には複雑な諸利害関係の競合とその調整のなかで行なわれたものであろう。

この王は「丹波国桑田郡」（京都府亀岡市・京都市など）に居住していたといい、和銅分割以前の「丹波」が王位に就いても不思議でないくらいの人物を養育し、また実際にも輔弼することの可能な勢力を保持していた地域ということになる。ただこの人は威儀を正

して迎えに来た使節に怖れをなし、何処とも知れず行方をくらましてしまった。その背後の詳細は分からないが、何かしら皇位の継承にともなう紛争なり対立なりがあったことをうかがわせるものであろう。実際に仁徳天皇から始まる皇位継承は、明確な継承ルールが定まっていないこともあって、^{けんぞう} 顕宗・^{にんけん} 仁賢天皇にいたるまで激烈な競争を毎回起しており、そのために滅んだ人は多い。推定にとどまるが継体の即位についてもそうした紛争、それも正史が書き残すことをはばかるようなそれがあったのでないか。その紛争に継体やまた彼を支えた勢力も巻き込まれる可能性があったわけで、即位に慎重になるのは当然であろう。「三国」に迎えに来た使節たちに心底に疑いがあるからと容易に受諾せず、「久しく皇位に「就」^つ かなかった。

3. 河内馬飼首荒籠

では何故ついには即位にいたったのか。そこに登場するのが河内馬飼首荒籠^{かわちのうまかいのおびとあらこ} ^(注9)である。継体は「適」彼を知っていたという。この「適」はいずれの刊本も「たまたま」と読んでいるが、寛文本には「マサニ」の訓が付されている。諸本は寛文本の訓を捨てているが、要するに継体は即位以前、迎えられる前の地元時代からこの人物を知っていたことになる。そこで継体は使いを「奉遣」して大臣・大連らの「本意」を荒籠に確認し、その結果を得て即位ということになる。

この人物の歴史的な性格だが、他には登場がなくよく分からない。ただ河内馬飼氏は別に見えていて、ある程度この氏族の性格を知ることができる。

馬飼そのものがそうだが、これは渡来系の技術である。そしてその養育に^{うまかいべ} 従う馬飼部が各地に設置され、それらの部を統率する伴造が馬飼氏であった。この一族に河内馬飼首御狩^{みかり} ^(注10)があり、継体の命によって新羅へ派遣された近江臣毛野の「僱人」として軍事行動にあたっている。御狩はまた河内母樹^{おもものき}馬飼首御狩ともあって、この「母樹」は母木邑・母木寺などからして現東大阪市あたりと考えられ、中河内になる。つまり河内を本拠として馬飼^(注11)の伴造として王権に奉仕しており、当然ヤマト王権の事情なり情報なりに詳しくあったことが推定できる。おそらくは渡来系氏族と思われるその一族と継体は即位前に接触があったのであり、御狩の外征関与とも合わせてこの氏族から内外の情報を得ていたことが当然予想され、その情報による判断のち即位したということを見逃すわけにはいかないだろう。継体・欽明朝はいわゆる任那滅亡を持ち出すまでもなく、空前の外交的危機にヤマト政権が巻き込まれた時代であることはいうまでもないが、この状況下での即位であってみれば荒籠から得たであろう情報の重要性は大きな意味があったのでないか。

河内、まして河内馬飼氏の本拠地は、現在の大阪湾地形とは異なり大きく湾入する旧河

内湖の湖畔に位置して、古代海上交通の要衝であった。だからこそ神武天皇が東征の果てに大和入りするとき、筑紫・安芸・吉備などを経て「難波碕」に到り、まず上陸した地点が「河内国の草香邑の青雲の白肩之津」であった。^(注12)この津は早く詳細に考定されているように、^(注13)「今に『クサカ』の名」として「孔舎衛村の大字日下（旧日下村）及其の地内にある草香山」があり、それは「古名」を伝えていて、実否は問題外として神武最初の上陸地はここに設定されている。「往時今の河北の平野を占めていた潟湖に臨ん」だ津であった。東大阪市日下町の地名を残すが、難波津と並んで重要な港津だったのであり、当然国内外のさまざまな情報の行き交う地である。確かに難波津に比して史料は極めて少なく、その実態は不明としかいいようがないが、神武天皇の初上陸の地にここが設定されたことの意味は決して小さくはない。まさにそのあたりに河内馬飼氏は勢力を張っていたのである。

4. 大伴金村と大伴氏

この点において留意すべきは、継体天皇擁立に主導権を發揮した大伴金村のことである。仁賢・武烈・継体・安閑・宣化、さらに欽明までと六朝に渡って大連を務めて国政に重きをなしたが、朝鮮半島情勢が緊迫の頂点に達した欽明朝初年にヤマト政権の主導的立場を失う。同じ大連であった物部尾輿が継体朝における「任那の上^{おこし} 哆唎^{おこしたり}・下^{あろしたり} 哆唎^{さだ}・娑陀^{むろ}・牟婁^{むろ}四縣」の金村による百済への“割譲”を非難し、それを受けて結局「住吉の宅」に退^(注14)隠、以後大伴氏の勢力は下降する。欽明は金村を擁護したようだから必ずしも孤立に追い込まれたわけではなく、国論そのものが分裂していたようだが、ともかくその外交政策を失策とされて敗北、政権中枢部から退くことを余儀なくされたということになる。彼は他にも近江臣毛野の新羅遠征、筑紫磐井の乱など海外情勢に関わる重要政策に関与していて、外交が当時の国家的課題であったことはむろんだが、金村がそれに深く関わったことは明白である。後年に非難にさらされたが、そこまでは当時のヤマト政権の最大課題である外交に大きな役割を果たし、功績を挙げてきた。そうした流れで継体天皇の即位への彼の行動も考えてみる必要があるだろう。

「任那」問題がなお色濃く尾を引いていた敏達朝、倭国朝廷はその「復興」のために「百済」の「火葦北^{ひのあしきたのくにのみやつこ} 国^{あり} 造^{しと} 阿利斯登^{だちそちにちら}が子^(注15) 達卒^ひ 日羅」を招聘しようとした。九州「火^ひ」地域（のちの肥前・肥後）の国造一族の血を受ける人物が、百済国において「達卒」という官位を得て出仕していたのである。当時の東アジア諸国において外交の重要性は倭と百済において違いはなく、その知識と技術、あるいは人脈を持っていた日羅は百済側においても必要な人材で、ためにその倭国への派遣に難色を示している。^(注16)結局は倭国に来ることになるのだが、この時に日羅は

^(宣化) 檜 隈宮御宇天皇の世に、我が君大伴金村大連、国家の奉為に、海表に使わしし火葦北
^{おさかへのゆけい}
 国造刑部鞞部阿利斯登の子、臣達卒日羅、天皇の召すと聞きたまえて恐れ畏みて来朝せ
 り。

と述べたという。^(注17)「火葦北」、すなわち現熊本県地方にまで大伴氏ないし金村はその勢力を
 及ぼしており、その地の国造家の人物が金村を「我が君」とまで呼んでいる。そして現に
 その意向を強く受けて百済に派遣され、「子」の日羅にいたって百済国朝廷に官人として
 出仕したのである。日羅はかなり詳細に百済国の内情を倭国朝廷に進言してもおり、達卒
 は百済十六品の第2位で、当然のことながら国内事情に深く通じた百済高級政治家であっ
 た。彼は「現地からこの女性との間に生れた韓子」の可能性も高く、^(注18)この一点をもってしても、
 大伴金村が国際事情の把握を大きな政治的利点としていたことは疑いないように思われ
 る。

金村が退隠した先が「住吉の宅」であったというのも興味深い。いうまでもなく『倭名
 類聚抄』にいう摂津国住吉郡の地で、住吉神社が鎮座し、また「清江」^{すみのえ}とも記されるように、^(注19)
 大阪湾に面した海上交通の要衝であった。むろん大伴氏は後にはヤマト政権の存在する奈
 良盆地東南部に拠点を構えるが、本来の本拠地である河内・和泉地方にも拠点は維持して
 いたのであり、^(注20)それは対外交渉・交流に適切地であることによる。金村時代はむろん、大
 伴氏という氏族そのものの存在形態に関わるものであった。その金村によって継体が擁立
 されたことの意味は、決して小さくはない。

そして先に触れた継体擁立の“功績者”である河内馬飼首荒籠も、まさにこのあたり
 の地元豪族なのである。大伴氏による河内地域一帯への影響力保持があったことを考えれ
 ば、彼の継体との接触は、金村の意を受けたものだったであろうことが浮かびあがってく
 る。蘇我氏が渡来人をいわば配下に組織し、それによって巨大な勢力を形成したことは衆
 知のことだが、河内馬飼氏が渡来人であるとすれば、大伴氏も同じく彼らを組み入れるこ
 とによって勢力の拡大と海外情報の収集をはかっていたことになる。

王族であろうが豪族であろうが、越前や近江に地盤を持つ継体は、^(注21)けっして突然・奇
 抜に登場してきたのではなく、瀬戸内・淀川・琵琶湖・日本海とつながる当時の倭国の海
 外生命線と密接に関わってのその即位であった。まず候補となった丹波の倭彦王について
 も、後の丹後も含めた丹波は日本海つまりは海外とのつながりは深く、かつて「丹後王国
 論」を提唱された門脇禎二氏もつとに強調されたところである。^(注22)金村ないし当時のヤマト
 王権が、ともに日本海地域につながる人物を擁立したということは、大伴氏の存在形態か
 ら考えても決して軽視できないと思う。

そう考えてはじめて、樟葉宮・筒城宮・弟国宮^{つづみのみや おとくにのみや}という継体の宮都のことも理解できる。

この三宮都はいずれも当時のヤマト政権の本拠地より北、淀川水系に接する樟葉・乙訓、また淀川に続く水系である木津川に接し、かつ河内へと抜ける要衝の地に設定されたのであり、明らかに国際情勢の展開とそれへの倭国の対応を原因・背景とする、いわば積極的な遷都であった。樟葉宮での即位も、通説的に言われているように大和を地盤とする旧来のヤマト王権、つまりは大伴金村を中心とする継体擁立反対勢力との対立があって大和に入ることができなかったということもあったかも知れないが、海外情勢に機敏に果敢に対応するためという積極的な意味も見逃されてはならないと思う。

海外情勢との関係ということでは、和歌山県橋本市の隅田八幡宮^{すだはちまんぐう}に伝来する人物画像鏡の銘文も注目される。この銘文については古来多くの説が出されているが、最も仔細な分析を及ぼされた山尾幸久氏^(注23)は、銘文中の「癸未年八月」を503年とし、百済王の「斯麻」王^(注24)（武寧王）の即位502年12月と関わらせて「癸未年八月はまさしく即位の直後」で、前王東城王^{とうじょうおう}の廢位・殺害という「異常」な退位を受けて「即位直後の武寧王が倭国に遣使して前王の修好を尊重して継承するという従属的奉仕関係の更新記念鏡をかなり大量に製作」したものとされた。事実当時の武寧王は『三国史記』によれば501年・502年と相次いで高句麗と戦闘を交え、503年・506年と今度は^{まっかつ}靺鞨と争うなど空前の外交的危機にあった^(注25)。よく知られているように武寧王こと諱「斯麻」は、蓋鹵王^{がいろおう}が倭国に派遣した夫人の「孕める婦」が倭国「筑紫^{かから}の各羅島」でもうけた子で、ために「島君」と名づけられて百済に送還された人物という^(注26)。生前から倭国とゆかりがあったということになるが、この伝承そのものの確実性はともかくとして、継体天皇が即位以前から百済と交流・交渉を持っていたのは事実としてよからう。まさに即位以前から「百済王斯麻（武寧王）と交渉を行っていたことになる^(注27)」のである。

5. 倭の海外交渉ルート

こう考えてくると、継体天皇と東アジア世界との関係の重要性がよく理解できるが、そこで問題とせねばならないのは倭とを結ぶ具体的な道筋のことである。早く京都府京丹後市の函石浜遺跡^{はこいしはま}から新の王莽制定の「貨泉」が発見されていて、この貨幣が発行され通用していた紀元1世紀には、すでに日本海を越えてアジア大陸と日本列島との交渉がもたれていたことは疑いようがない^(注28)。

『日本書紀』には「北海」として日本海のことが登場する。キタツウミあるいはキタノウミと読まれたりするこの海は、倭国と海外をつなぐ航路として大きな役割を果たしていた。周知のようにこの表現は「都怒我阿羅斯等」伝承中に登場し、彼は朝鮮半島南端の「意富加羅羅国」の「王の子」として渡来、「筥飯浦」こと「角鹿」^{つぬが}（敦賀）へ至る過程

で「^{しまじまうらうら つたよ}島浦に留連いつつ」と述べられている。^(注29) 穴門（長門）・出雲を経由したという設定での表現だから、山口県から福井県に至る日本海を指す行程であることは明白で、伝承上人物の足跡とはいえ「意富加羅国」―「穴門」―出雲―「筥飯浦」、つまり日本海経由ないし日本海横断の交通路が現に存在したことはいうまでもなかるう。今は埋立てで消滅したのことが多いが、日本海岸にはいくつもの潟湖があったし、小さな島々も点在していた。それらの「島浦」をつたわりながらの航路が存在したのであって、「環日本海文化圏」といわれることがあるが、古代日本海は日本列島とアジア大陸を分離・隔離するものでは決してなく、まさに地中海として、東アジア世界をつなぎ合わせる廻廊の役割を果たしていたのである。前掲函石浜遺跡すぐ東には、ともにすでに消滅してしまっているがかつて潟湖があり、そこに面して立地する^{しんめいやま}神明山古墳・^{あみのちようしやま}網野銚子山古墳といった巨大古墳がある。海を活動の場とした古代豪族の墓所であることは確実であって、とりわけ神明山古墳は式内^{たかの}竹野神社に隣接し、「^{たにはのおおがためし}且波大県主」と呼ばれた古代丹波最大豪族のものであったと思われ、^(注30)この豪族は当然「北海」の海上活動を重要な基盤として豪族になったと考えられる。

その勢力の大きさは、この「且波大県主」^{ゆこり}「由碁理」の娘が開化天皇の妃になったこと、^(注31)また垂仁天皇の妃の^{たかのひめ}「竹野媛」のことなどからも理解できる。大王が婚姻関係をもって連携せねばならないほどの勢力が京都府の日本海側に存在したということであり、詳細は不明ながらも、顕宗・仁賢天皇が「丹波国の^{よさき}余社郡」に難を避けたこと、つまりは王族を支えるだけの豪族が存在したことも合わせて、この地域において「北海」を活動場所として形成された勢力の大きさをよく理解することができる。

そしてその「北海」の最大拠点港は敦賀であった。そうであればこそ想像上の人物の「意富加羅国」王子「都怒我阿羅斯等」が、倭国に立ち寄る港として登場することができた。

伝承上の事象とはいえ、敦賀には天皇行幸もあった。すなわち仲哀天皇が「角鹿」に「幸」してそこに^{かりみや}「行宮」を立て、その行宮を^{けひのみや}「筥飯宮」と称している。^(注34)「角鹿」こと敦賀の「筥飯」が行宮を営むほどに重要な地だったということを物語るが、さらに仲哀は「^{くまそ}熊襲国」を討つためにここから紀伊を経て「穴門」に向かう。ついで「角鹿」に滞在していた皇后の神功は、「角鹿」を発って^{ぬたのと}「淳田門」を経て天皇滞在の^{とゆらのつ}「豊浦津」に到ったという。^(注35)この「淳田門」は不明だがコースそのものは日本海航路を想定してのものであることは明らかで、「角鹿」がその拠点港であることをここでも確認できる。

また敦賀市所在の^{けひじんぐう}気比神宮の神威の大きいことも、古代「角鹿」の位置をよく物語る。この神社は古代には「筥飯」神社と称していたが、神功皇后は武内宿禰に命じて^{たけしうちのすくね}「太子」^{ひつぎのみこ}を連れて「筥飯大神」に参拝させた。後の応神天皇にあたる「太子」はその時「筥飯大神」と名前を交換し、結果「^{ほむたわけ}磐田別」となったという。^(注36)『日本書紀』は「見ゆる所無くして未

だ詳ならず」と注しているが、天皇と名を替えるほどの神威を持つ神社として描かれているわけで、他は「呪^{とこ} われたにもかかわらず「角鹿海の塩」のみは天皇の召し上がり物になったという話と合わせて、「角鹿」の位置の大きさを物語る。王権と密着した重要な地なのであって、その「重要」性の根拠は「北海」海上交通、また東アジア世界との交流・交渉との関係で説明する以外にないように思う。

余談だがこの敦賀と日本海海運が畿内と持つ関係は、後世疏水の開削計画となる。越前側の正田川水運を一部利用して琵琶湖北岸にまで運河を引くというもので、結局完成しなかったが歴史を一貫して日本海文化圏が持つ重要性をよく示す。むろん疏水計画は江戸時代のことに属するので古代の国際的環境とは特に関係しないが、前近代の最重要な運輸・通信機能が水運であったことを考え合わせると興味深いものがある。

6. おわりに

アジアの東端に位置する日本列島は、主として日本海を介して海外とつながり、その文化・文明を受容した。おそらくは「東海」と呼ばれ、偶発的な交流以外に考えられない環太平洋地域と異なり、「北海」こと日本海は、列島古代の歴史と文化において実に重要な役割を果たした。決して大げさではなく、「北海」は日本列島とアジア・ユーラシアを結ぶ回廊の役割を果たしていたのである。

欽明天皇 31 年 4 月、「越」の人「江渟^{こし}臣^{えぬのおみもしろ}裙代」が「高麗^{こま}の使人」の来航を告げてきた。よく知られているように、高句麗からはじめての公式使節であった。^(注38) 報告者が「江渟」氏であったように越前国（のち加賀国）江沼郡（福井県加賀市あたり）の「越^{ほとり}の岸」への到着であったようで、渡来の航路は間違いなく日本海のそれで、使節は越前から琵琶湖へ出て、朝廷はこれを「飾船^{かざりぶね}」によって「近江の北の山」に迎え、琵琶湖水運を経て「山背」^(注39)に到る。琵琶湖の湖上交通については省略に従うが、とにかく日本海—琵琶湖—淀川—瀬戸内というアジア大陸の文化・文明流入ルートがあったわけで、継体天皇の即位もこうした“環境”下でのことであった。

ところで「北海」航路において、それを成り立たせた重要な要素は潟湖である。あるときは人や物資の積み下ろしで賑わう経済拠点となり、またあるときは急激な気象変化から船と人・物を護ってくれる避難場所ともなった。ところがその潟湖は今多くが後世の埋め立てや干拓によって消滅している。したがって古代日本におけるこうした港津の機能は、現在の景観からはまったくうかがうことができない。地形図を慎重に読み解くことが必要なのは無論だが、なによりも考古学的調査による遺物・遺跡の在りようからの歴史復元が大きな意味を持つことを申し添えておきたい。

(いのうえ・みつお=当調査研究センター理事・京都産業大学名誉教授)

- 注1 『枚方市史』2 同市編 1972年・『大阪府の地名』II 平凡社 1986年ほか参照。上遠野浩一氏は「古代の楠葉をめぐる交通路」(日本書紀研究会『日本書紀研究』29冊、塙書房)2013年において樟葉の地理について、継体の樟葉宮即位は「楠葉をおさえることによって、山城・摂津・河内をおさえ、継体の拠点がより強固となると判断したから」などとして、詳細に論じておられる。
- 注2 『日本書紀』継体天皇24年是歳条。
- 注3 『続日本紀』和銅4年正月丁未条。『延喜式』兵部省式にも「楠葉」駅が見える。これらの樟葉・葛葉・楠葉などの訓は明確ではないが、現在は「く・ず・は」と清・濁・清で読まれている。『倭名類聚抄』にいう「久須波」は古代ではいずれも清音らしく、ならば「く・す・は」となるが、『古事記』の「玖須婆」の「婆」は「は」・「ば」どちらにも発音されたので(『時代別国語大辞典』上代編「主要万葉仮名一覧表」、三省堂・1967年)、正確にはきめがたいということになる。
- 注4 新日本古典文学大系『続日本紀』1脚注(鬼頭清明氏担当)。岩波書店 1989年。
- 注5 『古事記』崇神天皇段。『日本書紀』崇神天皇10年9月条にも武埴安彦謀反事件として見える。
- 注6 『古事記』安康天皇段。
- 注7 『日本書紀』継体天皇即位前紀。
- 注8 倉本一宏氏「大王の朝廷と推古朝」(岩波講座『日本歴史』2所収。岩波書店)2014年ほか、同様の主張は多い。
- 注9 河内馬飼氏や馬飼のことについては、水谷千秋氏『継体天皇と朝鮮半島の謎』文春新書 2013年 を代表的な業績として、幾人かの方が触れておられる。
- 注10 『日本書紀』継体天皇23年4月是月条。
- 注11 前掲『大阪府の地名』II。
- 注12 『日本書紀』神武天皇即位前紀戊午年3月丙子条。『古事記』も同じく「青雲之白肩津」とする。
- 注13 『神武天皇聖蹟調査報告』(文部省・1942年)。
- 注14 『日本書紀』欽明天皇元年9月己卯条。なお大伴金村については八木充氏「大伴金村の失脚」(日本書紀研究会『日本書紀研究』1<塙書房・1964年>所収)に詳細な分析がある。
- 注15 『日本書紀』敏達天皇12年7月丁酉条。
- 注16 『日本書紀』敏達天皇12年冬10月条。
- 注17 『日本書紀』敏達天皇12年是歳条。
- 注18 小学館本頭注。「韓子」は「吉備韓子」が見え、「大日本の人、蕃の女を娶りて生める子を韓子とす」とある(『日本書紀』継体天皇24年9月条)。また「紀臣」が「韓の婦」との間に儲けた子が百済の「奈卒」になったなどの例もある(『日本書紀』欽明天皇2年7月条)。恒常的にこうした現象は存在したし、現在のところ韓国の旧百済域においてのみ発見されている前方後円墳も、この観点でも考える必要があるだろう。
- 注19 『万葉集』1-69など。
- 注20 大伴氏の地盤・本拠地については金村の撰津「住吉の宅」(前掲注12)のほか、「大伴の御津

の浜松) (『万葉集』 卷1-63、68) からも摂津であることが判明する。また「大伴の高師の浜」 (『万葉集』 卷1-66) や、戦死した紀小弓の墓が「田身輪邑」 (大阪府岬町淡輪) に作られたように「大伴卿」と「紀卿」、即ち大伴氏と紀氏とがその勢力圏を隣接ないし重複させており (『日本書紀』 雄略天皇9年5月条)、大伴氏勢力が河内 (のちの和泉) にまでも及んでいたことが分かる。大阪湾沿岸の摂津・河内から紀伊にかけて、広く勢力圏を保持していた。

注21 諸説ある継体支持基盤についての論を鈴木靖民氏は「父系 (息長氏)・母系 (三尾氏) の出自集団が近江・越前にまたがって複合的である」と整理されている (同氏「倭国と東アジア」 <日本の時代史2『倭国と東アジア』 所収、吉川弘文館>2002年)。

注22 門脇禎二氏『日本海域の古代史』 東京大学出版会 1986年。

注23 山尾幸久氏『日本古代王権形成史論』 岩波書店 1983年。

注24 1世紀前の“発見”以来幾多の説が出されてなお定説を見ないが、年記の「癸未年」は西暦503年、「男弟王」ないし「孚弟王」は継体天皇、とする説が“有力”というところであろうか。

注25 森公章氏『東アジアの動乱と倭国』 吉川弘文館 2006年が的確で包括的な考察を加えられている。

注26 『日本書紀』 雄略天皇5年4月条・6月丙戌条ほか。

注27 前掲注8 倉本論文。

注28 貨幣は表面採取で、「明治36年ノ頃織田氏ノ製造工場ニ於イテ採集セル所」と述べる (「湊村函石浜石器時代ノ遺蹟」、 <『京都府史蹟勝地調査会報告』 第2冊所収、京都府>1920年)。したがって中世の輸入銭の可能性も残り、実際この遺跡からは中世の銭貨も発見されているが貨泉とは発見地点が異なり、弥生時代にもたらされた可能性が大きい (『函石浜遺跡とその発見者たち』 京丹後市丹後古代の里資料館 2006年)。京都府でいえばまた舞鶴市浦入遺跡から発見された丸木舟も興味深く、「北海」航路の具体的な姿を髣髴とさせる。

注29 『日本書紀』 垂仁天皇2年是歳条。

注30 『古事記』 中、開化天皇段。

注31 同前。

注32 『日本書紀』 垂仁天皇15年2月甲子条。

注33 『日本書紀』 顕宗天皇即位前紀。

注34 『日本書紀』 仲哀天皇2年2月戊子条。

注35 『日本書紀』 仲哀天皇2年6月庚寅条。

注36 『日本書紀』 神功皇后摂政13年2月甲子条、応神天皇即位前紀、『古事記』 応神天皇段、など。

注37 『日本書紀』 武烈天皇即位前紀。

注38 『日本書紀』 欽明天皇31年4月乙酉条。

注39 松原弘宣氏「琵琶湖の湖上交通について」 (続日本紀研究会『続日本紀の諸相』 所収、塙書房・2004年) 参照。早く藤原仲麻呂の乱に際して逃亡先越前への要港として、「船に乗」って向かった琵琶湖北岸の「浅井郡塩津」 (滋賀県長浜市) が見えている (『続日本紀』 天平宝字8年9月壬子条)。平城京―琵琶湖北岸―日本海敦賀という交通路の存在をよく物語っている。『万

葉集』(9-1734)には「高島の^(安曇)足利湖」(同高島市)から「塩津」・「菅浦」(長浜市)へと「漕ぎ過ぎ」たと見える。また『延喜式』主税上「諸国運送雜物功賃」条にも北陸道からは若狭を除いて佐渡にいたるまでのすべての国が「敦賀津」へ水運で集積、ついで「塩津」まで陸送、ついでふたたび水上を琵琶湖で輸送することになっていた。なお高句麗の後継国の渤海からの使節も、例外を除いてすべて日本海を横断する航路で、山陰・北陸海岸へのルートをとっている(上田雄氏『渤海使の研究』明石書店 2002年ほか参照)。

